

現今大学生の学習意欲に関する一考察（２）

吉 岡 剛

（はしがき）

本論稿は、昨年（1989年）12月発刊の『教育学部論集』創刊号で発表した上記の標題（１）に続くものである。したがって、論の展開を示す意味で、先ず前回の目次を掲げておきたい。

はじめに

1. 私語をめぐって
2. 学習意欲低下の要因仮説
3. これまでに見られる研究業績
4. アンケートについて
5. 考察

（1）実態整理及び診断

- <1. 回答者の分析>
- <2. 判断対象学生の実態分析>

<3. 受講態度を巡って>

- ア. 「学習意欲」
- イ. 「進学理由」
- ウ. 「受講状況」
 - あ. 出席率
 - か. 遅刻・早退
 - こ. 居眠り
 - く. 内職
 - け. 私語

なお、付表は既に<15-4>まで掲載した。今回はこれを受けて<16>より始まる。

さて、先回考察したアンケート（調査）は、大学生に関しては、私立大学2校と、公立短期大学1校の、計3大学の学生が対象であったが、今回は新たに国立大学2校と公立大学2校の学生を加えた。したがって、前稿の<表3>を補い、あらためて、その属性を以下に明記しておきたい（表3、補）。

なお、比較考察も行なうので、大学の固有名詞は今回も明示していないが、表中「名称」部分（ ）内に、社会で一般に用いられている通俗的表現を付記し、各大学の大体の有り様を表わした。つまり、日本の全大学を厳密に縮図化して調査することが不可能である以上、或程度これで全大学の状況を捉えたものとして、仮定的に確認したつもりである。

なお、以下の統計で大学同士を合算平均する場合、学生数が不均衡のため、予め各大学内の平均を出し、その上でそれらを合計、更に平均を割り出すことにした。勿論、大学内平均は実数によっている。また、各大学間、および国公立大学と私立大学間、更に四年制大学と短期大学、そして男女間の差については、考察の必要に応じて統計処理を加え、百分率検定（ χ^2 ）を行なった。

表 3（補） 回答大学生の属性（大学・科目・専攻・学年・性別）および人数

設置者	名称(通俗分類)	受講科目(アンケート時)	専攻	学 年	男子	女子	計
私立	A 大 (一般大学)	一般教養(社会科学)	社会	主に1・2年	172	80	252
		教育学科専門科目	教育	主に2年	63	101	164
		教職課程科目	文学	主に2・3年	35	38	73
		教育学ゼミ	教育	3年	4	14	18
	計				274	233	507
私立	B 大 (有名大学)	教職課程科目	文学 法学	主に2・3年	55	41	96
	私立大・計				329	274	603
	国立	D 大 (旧帝大)	一般教養(社会科学)	理工	1年	80	14
文学							
教育				2・3・4年	8	5	13
計						88	19
国立		E 大 (地方大学)	教育学科専門科目	教育	3・4年	21	24
	国立大・計				109	43	152
	公立	F 大 (市立大学)		文学	2・3・4年	5	18
G 大 (女子大学)			理学 文学	1年	—	111	111
公立大・計				5	129	134	
国公立大・計					114	172	286
四年制大学・計					443	446	889
公立	C短期大学 (女子のみ)		家政	1・2年	—	117	117
総 計					443	563	1,006

5. 考察（つづき）

(1) 実態整理および診断（つづき）

既に前回，大学教員 105 名と短期大学教員 24 名によるアンケート回答で，大学生の学習意欲の低下状況につき判断を加えた（表 6）。つまり，＜図 1＞に見るとおり，大学で「半分以下の学生にしか意欲がない」とする者が，計 54.3%と高かった。それは中学高校教員による中・高生それぞれの学習意欲判断と比較しても低いものであった（表 7-1）。もっとも，中高生の場合，

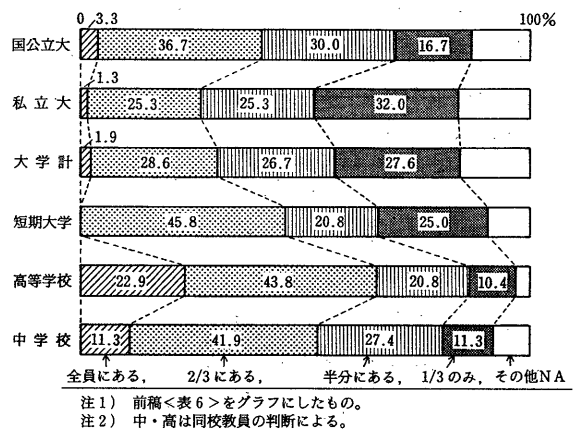


図 1 大学教員による「大学生の学習意欲」判断（%）
（中・高校比較資料を含む）

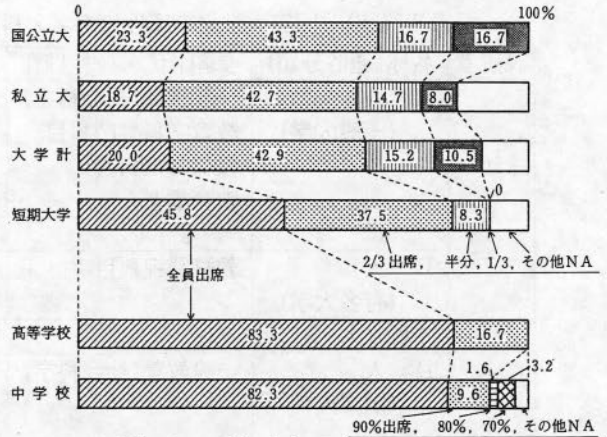
特に、目前の入試に備える勉強意欲であって、大学生とは状況が異なることを否定できないが、それでも、カイ自乗検定によると、1%水準で有意であった。[以下、有意水準は%で（ ）内に付記する。]

f. 授業出席（前稿aの補いとして）

学生の学習意欲は、具体的には、講義の『出席率』にみることができる。一般に「最近の学生は、比較的眞面目に授業に出席する」と、一部皮肉を込めて言うことがあるが、それは必ずしも正しくはない。前回見た大学教員の判断によれば、＜図2＞のとおり、「全員出席」と見られる授業は、全平均20.0%で、「3分の2出席」が普通であり、授業の68.6%はそれである。なお、短大は全員出席が45.8%と、四年制大学（以下「四大」という）と大きな差（有意水準1%）を示している。つまり、一般に思われているよりも、短大生の方が、短期間に多くの単位を取得するため授業も多く受けていることになる。ちなみに、この一講義の平常出席率は、教員に、自分の授業がもつ学生への意味を考えさせる一つの尺度として有用であろう。

ところで、学生自身の回答によれば、「授業に殆ど欠席しない」者の割合は、＜表16＞のようになる。

大学間には較差があり、地方国立大学男子の19.0%から、公立女子大学の58.6%まで、＜図3＞で分かり易く示したように大きく広がる。また、女子の出席率が高い（1%）。しかし、全平均35.4%が示すものは、全体として学生の出席が必



注) 前稿＜表11-2及び3＞をグラフにしたもの

図2 大学教員による「学生の出欠状況」判断 (%) (中・高校比較資料を含む)

表16 大学生による「授業無欠席者」回答 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	19.7	37.8	28.0
B 大	27.3	31.7	29.2
私大平均	23.5	34.8	28.6
D 大	43.2	47.4	43.9
E 大	19.0	25.0	22.2
F 大	()	27.8	30.4
G 大	—	58.6	58.6
国公立大平均	31.1	39.7	38.8
全平均	27.3	38.1	35.4
C 短大	—	35.0	35.0

注) () は実数が5名と少ないため計算せず、—は、対象がいない大学である。
(以下、同じ)

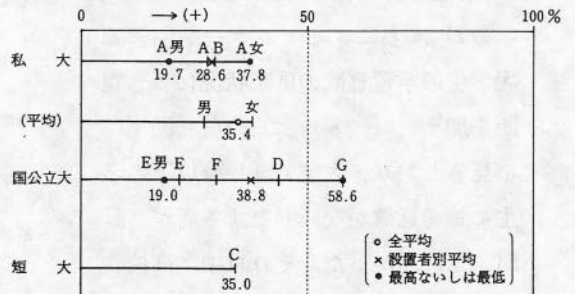


図3 「無欠席者」の大学間・男女間較差

ずしも良くないということである。

では、授業中の学生の状況はどうであろうか？ 前回の私大学生の自己評価（表 8 と表 11-1）に、国公立大学生のそれを加えて、幾つかのトピックで取り上げてみよう。

g. 講義ノートの取り方

受講中の学生の最も一般的な学習である『ノート取り』から見てみよう。学生の回答によれば、出席率同様、これも、<表 17-1><図 4>の如く較差が大きい、旧帝大及び女子の率が格段に高い（ともに 1 %）。因みに、

こうした図示で各大学のプロフィールを描けば、学生のカラーが示されることになる。しかし、いずれにしろ全体では 30.7%，つまり、3 分の 1 弱のみが「よくノートを取る」だけである。

なお、ノートの取り方は、「工夫しながら」が（表 17-2）短大を除いて女子に多く（1 %），たとえば、有名

私大女子の場合は 63.4%に及んでいる。逆に男子は、有名私大も 29.1%で、旧帝大は 4 分の 1 と少ない。しかも、入試難関校の旧帝大も「主として板書を写す」（表 17-3）が 45.8%と多く、全体として 44.9%であることは、短大の 75.2%と併せて、学生の積極性・主体性の少なさを示しているといえよう。但し、この中で、有名私大女子の 22.0%は、「工夫しながら取る」率と併せて、自ら考える積極性を示すものといってよい（1 %）。

表17-1 「ノートをよく取る」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	11.3	23.6	17.0
B 大	20.0	43.9	30.2
私 大 平 均	15.7	33.8	28.1
D 大	36.4	57.9	40.2
E 大	14.3	20.8	17.8
F 大 ()		38.9	34.8
G 大	—	44.1	44.1
国公立大平均	25.4	40.4	34.2
全 平 均	20.5	38.2	30.7
C 短 大	—	29.9	29.9

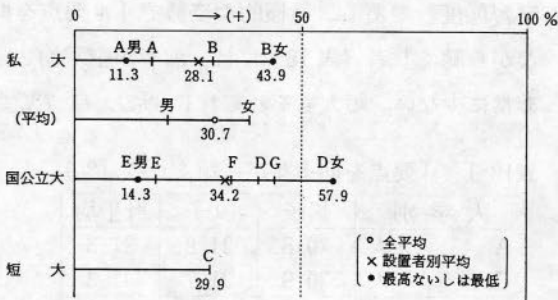


図 4 「ノートをよく取る」者の大学間・男女間較差

表17-2 「ノートを工夫しながら取る」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	22.6	30.0	26.0
B 大	29.1	63.4	43.8
私 大 平 均	25.9	46.7	34.9
D 大	25.0	42.1	28.0
E 大	19.0	41.7	32.1
F 大 ()		55.6	52.2
G 大	—	40.5	40.5
国公立大平均	22.0	45.0	38.2
全 平 均	23.9	45.6	37.1
C 短 大	—	21.4	21.4

表17-3 「主として板書を写す」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	32.1	49.4	40.0
B 大	29.1	22.0	26.0
私 大 平 均	30.6	35.7	33.0
D 大	45.5	47.4	45.8
E 大	61.9	58.3	60.0
F 大 ()		44.4	43.5
G 大	—	54.1	54.1
国公立大平均	53.7	51.1	50.9
全 平 均	42.2	45.9	44.9
C 短 大	—	75.2	75.2

なお、期末試験前の「ノートの借用」は（表17-4）圧倒的に男子に多く（1%）、53.5%と半数を越える。特に一般私大では、男子の65.3%と並んで、女子も50.2%と高い。このことは当然出席率の低さとも関係があり、地方国大の場合、最低の「無欠席」率22.2%に即して、「ノート借用」者は、71.4%にも及んでいる。

h. 受講態度

ノートの取り方と関係するのが、『授業中の学習態度』である。積極的な姿勢で「*要点を抑えながら聴く」者（表18-1）および「考えながら聴く」者（表18-2）は、前者が全平均23.7%、後者が13.4%と、大学間較差はあるが非常に少ない。短大もそれぞれ6.8%と、1.7%で、四大とともに、いかにも受動的である。

表18-1 「要点を抑えながら聴く」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	20.8	21.9	21.3
B 大	30.9	31.7	31.3
私大平均	25.9	26.8	26.3
D 大	30.7	31.6	30.8
E 大	23.8	12.5	17.8
F 大	()	16.7	13.0
G 大	—	27.9	27.9
国公立大平均	27.3	22.2	22.4
全平均	26.6	23.7	23.7
C 短大	—	6.8	6.8

受講姿勢に関わるマイナス項目「授業に集中できぬ」の回答者は、国公立で21.0%、5分の1となっており、全平均で18.4%もいる（表18-3）。なお、大学の学習に「やる気を失った」者が13.8%（表18-4）いるが、この両方で重複者を考慮しても、全体の4分の1が授業に積極的に参加できていないことになる。なお、有名私大女子の「集中できない」者ゼロは、「やる気を失った」者の少なさ（5%）とともに、実数41人中の数としても注目される。

勿論、この「やる気」や「集中度」に欠けな

表17-4 「ノート借用」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	65.3	50.2	58.4
B 大	54.5	19.5	39.6
私大平均	59.5	34.9	49.0
D 大	22.7	15.8	21.5
E 大	71.4	25.0	46.7
F 大	()	33.3	30.4
G 大	—	18.0	18.0
国公立大平均	47.1	23.0	29.2
全平均	53.5	27.0	35.8
C 短大	—	48.7	48.7

表18-2 「考えながら聴く」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	10.9	11.2	11.0
B 大	10.9	14.6	12.5
私大平均	10.9	12.9	11.8
D 大	21.6	5.3	18.7
E 大	9.5	12.5	11.1
F 大	()	16.7	17.4
G 大	—	9.9	9.9
国公立大平均	15.6	11.1	14.3
全平均	10.9	11.7	13.4
C 短大	—	1.7	1.7

表18-3 「集中できぬ」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	21.5	15.9	18.9
B 大	12.7	0	7.3
私大平均	17.1	8.0	13.1
D 大	15.9	15.8	15.9
E 大	23.8	20.8	22.2
F 大	()	27.8	26.1
G 大	—	19.8	19.8
国公立大平均	19.9	21.1	21.0
全平均	18.5	16.7	18.4
C 短大	—	30.8	30.8

い者が4分の3いるわけだが、授業に出席していて、大学授業の一般的な「1講時=90分」を「長い」と感じている者が43.1%もいる（表18-5）。もっとも、旧帝大と公立女子大は1年生が主な対象であり、高校までの50分授業と比較して長いと感じるのは、6月段階では当然かもしれない。とはいえ、短大の65%を含めて、講義の後半30分の姿が容易に想像される。

表18-4 「やる気を失った」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	20.8	19.3	20.1
B 大	7.3	4.9	6.3
私大平均	14.1	12.1	13.2
D 大	13.6	5.3	12.1
E 大	14.3	16.7	15.6
F 大	()	5.6	8.7
G 大	—	18.9	18.9
国公立大平均	14.0	11.6	13.8
全平均	14.0	11.8	13.6
C 短大	—	24.8	24.8

表18-5 「1講時90分は長いと感じる」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	43.8	38.6	41.4
B 大	36.4	22.0	30.2
私大平均	40.1	30.3	35.8
D 大	46.6	31.6	43.9
E 大	28.6	33.3	31.1
F 大	()	50.0	47.8
G 大	—	64.0	64.0
国公立大平均	37.6	44.7	46.7
全平均	38.9	39.9	43.1
C 短大	—	65.0	65.0

なお、講義中「睡魔に襲われる」者もく表18-6><図5>のように多い。中でも旧帝大の男子69.3%が目立つが、全体として女子の比率が高く、公立女子大の73.9%を最高として、平均51.8%と、半ばを越えている（1%）。端的に言って、授業への出席は、学生に大きな苦痛として意識されているのである。したがって、<表18-7>に見るように「休講の多さを不満に思う」者は極端に少なく、3.0%ということになる。旧帝大で言えば、実数107人中只1人であり、多い方の有名私大女子でも、全41人中3人に過ぎない。これは一面で休講が少ないことを意味するのだろうか？ 勿論、休講による空き時間の有効活用も考えられる。その自由さが、授業の苦痛感に比べて歓迎されるのであろう。

i. 受講の意味付け

全体の学習姿勢が消極的でも、大学への進学を「親に感謝しつつ通学して

表18-6 「睡魔に襲われる」者（%）

大学別	男子	女子	計平均
A 大	4.6	49.8	47.7
B 大	36.4	43.9	39.6
私大平均	20.5	46.9	43.7
D 大	69.3	47.4	56.1
E 大	28.6	62.5	46.7
F 大	()	33.3	39.1
G 大	—	73.9	73.9
国公立大平均	49.0	54.3	54.0
全平均	34.7	51.8	50.5
C 短大	—	19.7	19.7

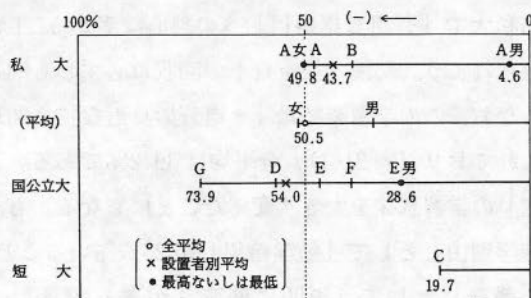


図5 「睡魔に襲われる」者の大学間、男女間較差

いる」者は多く（表 19-1）47.5%に及ぶ。表18-7 「休講の多さを不満に思う」者（%）

特に有名私大女子は58.5%と高い。一方、短大は、四大進学に比して有難味が少ないのか、20.5%，5分の1となっている（1%）。

なお、「学習の社会還元」を義務と考える者は少なく（表 19-2）、全体として18.9%である。特に、有名私大女子の24.4%と、旧帝大女子の21.1%、公立女子大の19.8%を保留すれば、一般には女子にこの考えが少ないといえる（10%）。なお、男子としては、旧帝大に幾分少ないことが目立つ（20%）。

大学別		男子	女子	計平均
A	大	3.3	3.0	3.2
B	大	3.6	7.3	5.2
私大平均		3.5	5.2	4.2
D	大	1.1	0	0.9
E	大	0	0	0
F	大	()	5.6	4.3
G	大	—	4.5	4.5
国公立大平均		0.6	5.1	2.4
全平均		2.0	3.4	3.0
C	短大	—	2.6	2.6

表19-1 「親に感謝しつつ通学している」者（%）

大学別		男子	女子	計平均
A	大	40.1	39.5	39.8
B	大	47.3	58.5	52.1
私大平均		43.7	49.0	46.0
D	大	43.2	36.8	42.0
E	大	52.4	33.3	42.2
F	大	()	55.6	56.5
G	大	—	52.2	52.2
国公立大平均		47.8	44.5	48.2
全平均		45.8	46.0	47.5
C	短大	—	20.5	20.5

表19-2 「学習の社会還元」に義務を感じている」者（%）

大学別		男子	女子	計平均
A	大	23.0	15.0	19.3
B	大	23.6	24.4	24.0
私大平均		23.3	19.7	21.7
D	大	13.6	21.1	15.0
E	大	23.8	12.5	17.8
F	大	()	11.1	17.4
G	大	—	19.8	19.8
国公立大平均		18.7	16.1	17.5
全平均		21.0	17.3	18.9
C	短大	—	5.1	5.1

この「感謝」と「社会還元の義務感」がプラス・マイナス両面で受講に反映するのは、全体として33.3%の学生が「熱心に聴く」「有用な内容や資格関係の講義」である（表 20）。つまり、一般的に学習がかなり個人的利益の問題として考えられていることがよくわかる。特に有名私大で「有用資格科目」への熱心な者が52.1%と高い（1%）ことは、学費との関係も考えられよう。勿論、投下資本の回収は必ずしも間違いや悪ではない。

なお、この学習姿勢は「*自分の身近な物に関連させて」具体的に学ぼうとする傾向にも現われており（表 21-1）、全平均は39.2%である。このことは、大学の理念としてある「真理探究」の学習意味を大きく変えたことにもなる。もっとも、次回に述べるように、学生の「大学進学理由」として「勉学希望」が25.7%いることは留意してよい。但し一方、「学習意欲の湧く講義」として「説明に厳密さがある講義」への評価は9.4%に過ぎないのである。（表 28-1）。

表20 「有用な内容や資格関係講義に熱心」
な者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	32.8	41.6	36.9
B 大	54.5	48.8	52.1
私 大 平 均	43.7	45.2	44.5
D 大	26.1	31.6	27.1
E 大	28.6	16.7	22.2
F 大 ()		27.8	26.1
G 大	—	35.1	35.1
国公立大平均	27.4	27.8	27.6
全 平 均	35.5	28.3	33.3
C 短 大	—	36.8	36.8

表21-1 「自分の身近なものに関連させて具
体的に学ぶ」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	37.6	36.5	37.1
B 大	38.2	41.5	39.6
私 大 平 均	37.9	39.0	38.4
D 大	39.8	26.3	37.4
E 大	47.6	45.8	46.7
F 大 ()		38.9	39.1
G 大	—	35.1	35.1
国公立大平均	43.7	36.5	39.6
全 平 均	40.8	37.4	39.2
C 短 大	—	28.2	28.2

j 学習姿勢

具体的に学ぼうとする学習方式は的確であるが、そのよう形で学習姿勢を確率した者はどの程度いるだろうか？

坂元の『学習技能調査表』および『学習意欲調査表』から借用した項目で見
ていこう。「*すべきことは巧く実行
できるよう、方法を考えてやる」者
33.5%(表 21-2)。「*何か調べるとき

や物事を考えるときは自分のアイデアを大切にする」者、男子 42.4%(1%), 全平均 29.9%
(表 21-3) (図 6) と、学習技能についての主体性は 3 分の 1 にある。特に、有名私大男子の
「アイデア重視」が目立つ (1%)。

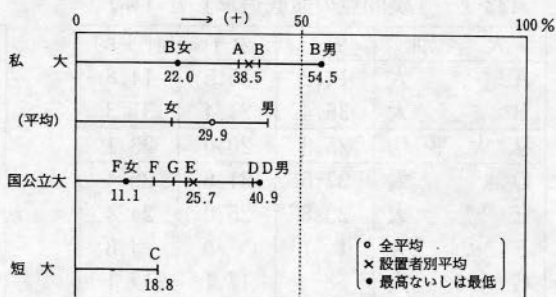


図 6 「自分のアイデアを大切にする」者の大学間、
男女間較差

表21-2 「実行方法を工夫する」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	33.6	37.3	35.3
B 大	47.3	46.3	46.9
私 大 平 均	40.5	41.8	41.1
D 大	29.5	47.4	32.7
E 大	19.0	33.3	26.7
F 大 ()		38.9	30.4
G 大	—	28.8	28.8
国公立大平均	24.3	37.1	29.7
全 平 均	32.4	38.7	33.5
C 短 大	—	34.2	34.2

表21-3 「自分のアイデアを大切にする」者
(%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	45.6	25.3	36.3
B 大	54.5	22.0	40.6
私 大 平 均	50.1	23.7	38.5
D 大	40.9	31.6	39.3
E 大	28.6	20.8	24.4
F 大 ()		11.1	17.4
G 大	—	21.6	21.6
国公立大平均	34.8	21.3	25.7
全 平 均	42.4	22.1	29.9
C 短 大	—	18.8	18.8

しかし、「*疑問点を徹底して追求する」者 21.4%(表 22-1) (図 7), 「*失敗したとき, 原因を突き止めようとする」者 20.5%(表 22-2), 「*難問にはファイトが湧き挑戦する」者 11.5%(表 22-3) と学習意欲そのもの, つまり, 坂元の言う「認知への追求」

面は少なくなる。もっとも, 「疑問点 図 7 「疑問点の徹底追求」者の大学間・男女間較差追求」に関しては, 有名私大男子及び旧帝大男子の場合, 3分の1は積極的である(ともに1%)。

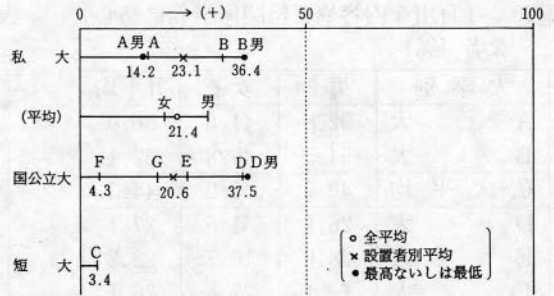


表22-1 「疑問点の徹底追求」者 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	14.2	15.5	14.8
B 大	36.4	24.4	31.3
私大平均	25.3	20.0	23.1
D 大	37.5	31.6	36.4
E 大	23.8	25.0	24.4
F 大	()	0	4.3
G 大	—	17.1	17.1
国公立大平均	30.7	18.4	20.6
全平均	28.0	18.9	21.4
C 短大	—	3.4	3.4

表22-2 「失敗原因の追求」者 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	23.0	16.7	20.1
B 大	25.5	9.8	18.8
私大平均	24.3	13.3	19.5
D 大	31.8	21.1	29.9
E 大	19.0	25.0	22.2
F 大	()	5.6	13.0
G 大	—	18.9	18.9
国公立大平均	25.4	17.7	21.0
全平均	24.8	16.2	20.5
C 短大	—	8.5	8.5

一方, 学習への「自己管理」(坂元) も次のように低い(表 23-1)。「*勉強計画を立てる」者 7.9%, 「*それを実行する」者 12.0%, 「*その際能率を考える」者 13.7%がそれである。なお, 「社会的積極性」(坂元) についても「*グループ内で率先して活動する」者 6.1%, 「*意見があると進んで発言する」者 6.3%と少なく, 個人化が進んでいることがわかる。

何よりも, 実際に「*目的意識をもって勉強している」自己管理の行き届いた者は, 大学間較差はあるが, 全体では 29.9%に過ぎないのである(表 23-2)。

表22-3 「難問挑戦」者 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	8.8	9.0	8.9
B 大	7.3	7.3	7.3
私大平均	8.1	8.2	8.1
D 大	15.9	15.8	15.9
E 大	4.8	20.8	13.3
F 大	()	5.6	13.0
G 大	—	10.8	10.8
国公立大平均	10.4	13.3	13.2
全平均	9.2	11.6	11.5
C 短大	—	5.1	5.1

表23-1 「学習姿勢」の各面（％）

	回 答 項 目	国公立	私立	男子	女子	全平均	短大
自己管理面	勉強計画を立てる	6.5	10.6	8.4	7.3	7.9	3.4
	計画を実行する	10.1	15.8	12.2	11.3	12.0	12.0
	能率上の工夫をする	13.6	13.9	15.1	12.7	13.7	17.1
社会的積極性	グループ内率先的活動	5.1	8.1	4.5	6.6	6.1	7.7
	意見の積極的発言	4.8	9.3	5.3	8.0	6.3	3.4

しかし、ここで、回答チェックしなかった残り70%余りの『自己学習』はどうなっているのだろうか？

自主的学習状況は、「高校ほど勉強しなくなった」者が58.5%に及び、比較的男子に多い（1％）が、短大も77.8%と高い比率になっている（表24-1）。また、「試験前や課題が出たときに勉強する」者が60.7%と高い（表24-2）。逆に見れば「毎日学習する」者2.7%、「学習多忙」者13.6%、「試験前の計画学習」

者13.8%、「ふだんから専門読書をする」者13.5%と非常に少ない（表24-3）。なお、「要点に印を付ける」者は、受験勉強などで身に着けたのであろう、70.6%にも及んでおり（表24-4）、特に女子に目立つ（1％）。あとは勉強への刺激など大学側の対応が必要なのであろう。

表24-1 「高校程勉強しない」者（％）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	68.2	52.4	60.9
B 大	43.6	43.9	43.8
私大平均	55.9	48.2	52.4
D 大	61.4	42.1	57.9
E 大	71.4	79.2	75.6
F 大 ()		6.1	52.2
G 大	—	60.4	60.4
国公立大平均	66.4	47.0	61.5
全 平 均	61.2	47.4	58.5
C 短大	—	77.8	77.8

表24-2 「試験前や提出物時のみの勉強」者（％）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	69.3	64.4	67.0
B 大	56.4	63.4	59.4
私大平均	62.9	63.9	63.2
D 大	50.0	36.8	47.7
E 大	47.6	58.3	53.3
F 大 ()		83.3	73.9
G 大	—	63.1	63.1
国公立大平均	48.8	60.4	59.5
全 平 均	55.8	61.6	60.7
C 短大	—	88.9	88.9

k. 大学観

進学後、大学への期待はやがて破られる。大学を「期待外れ」とする者は<表25-1>に見るように、25.9%と、4分の1強となる。なお、私大の方が「期待外れ」感が強く、3分の1、33.6%となっている（1％）。これは私大の内容が問われていることになるのだろうか？ —

表24-3 日常学習状況 (%)

回 答 項 目	国公立	私立	男子	女子	全平均	短大
毎日学習する	3.4	0.9	2.3	3.6	2.7	0.8
学習で多忙	16.9	7.2	11.2	14.4	13.6	14.5
高校同様に学習	12.5	15.8	13.7	14.2	13.6	5.1
試験前は計画学習	12.2	16.9	15.3	14.0	13.8	10.3
ふだんから専門読書	12.7	15.3	16.5	11.8	13.5	0.8
日常、読書が多い	19.9	15.3	20.5	17.2	18.3	10.3

表24-4 「要点に印を付ける」者 (%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	58.4	84.1	70.2
B 大	53.6	87.8	85.4
私大平均	56.0	86.0	77.8
D 大	46.6	73.7	51.4
E 大	42.9	79.2	62.2
F 大 ()		88.9	73.9
G 大	—	80.2	80.2
国公立大平均	44.8	80.5	66.9
全 平 均	57.9	82.3	70.6
C 短大	—	82.0	82.0

表25-1 「大学期待外れ」 (%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	37.6	29.6	33.9
B 大	32.7	34.1	33.3
私大平均	35.2	31.9	33.6
D 大	15.9	5.3	14.0
E 大	38.1	20.8	28.9
F 大 ()		27.8	21.7
G 大	—	23.4	23.4
国公立大平均	27.0	19.3	22.0
全 平 均	31.1	23.4	25.9
C 短大	—	31.6	31.6

方、入学後、「目標喪失感を持つ」者は、旧帝大女子を例外として (20%) 一様に多く、全体では16.0%(表25-2)。また、「学習方法不明」者も14.4%いて(表25-3)、受験が如何に目的化され、学習方法を歪めているかがわかる。大学での、自由な、また自己責任による自主的学習に適応できぬ者が、この2項を併せて30%、重複者を考慮しても、20%以上はいるということになる。したがって、更に「期待外れ」をこれに加えれば、重複を考えても、半数以上の者が、大学で不満と不安の中に学生生活を送っていることになる。

表25-2 「学習目標喪失」者 (%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	25.5	17.6	21.9
B 大	14.5	17.0	15.6
私大平均	20.0	17.3	18.8
D 大	11.4	5.3	10.3
E 大	19.0	20.8	20.0
F 大 ()		11.1	13.0
G 大	—	15.3	15.3
国公立大平均	15.2	13.1	14.7
全 平 均	17.5	14.5	16.0
C 短大	—	23.9	23.9

表25-3 「学習方法不明」者 (%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	9.9	12.0	10.8
B 大	14.5	12.2	13.5
私大平均	12.2	12.1	12.2
D 大	13.6	15.8	14.0
E 大	9.5	0	4.4
F 大 ()		22.2	21.7
G 大	—	26.1	26.1
国公立大平均	11.6	16.0	16.6
全 平 均	11.9	14.7	14.4
C 短大	—	8.5	8.5

このマイナス状況に対し、大学を評価する者はどうであろうか？ 計算上では、「期待外れ」としなかった者が3分の2はいる。しかし、＜表 25-4＞に見るとおり、「学問に興味を湧いた」者が20.4%、「教養・知識が高まった」者17.2%、「思考力が高まった」者12.7%で、重複回答者を考えても、3分の1強のみが評価者といえるだろう。これは、既に見た多くのケースの3分の1に対応する。なお、「大学院進学希望」者は、特に旧帝大男子に目立って多く（1%）、全平均の13.8%に対し、38.6%を占める（表 25-5）。これは回答者に理科系が多いからとも考えられる。

表25-4 大学での学習効果

回 答 項 目	国公立	私立	男子	女子	全平均	短大
学問に興味を湧いた	21.1	19.0	15.4	20.2	20.4	2.6
教養・知識の増加	16.4	18.8	18.2	19.7	17.2	19.7
思考力の向上	11.8	14.5	13.9	13.4	12.7	6.8

1. 日常生活

＜表 26-1＞に見るとおり、「自分のしたいことで多忙」な者が全体として39.9%もあり、これが、半ば拘束される授業に対して学習姿勢の揺れを大きくしていることは疑いない。したがって、この「したいこと」の中身が授業内容と合致すれば、学生の学習意欲も増すはずである。もっとも、大学年齢に達して迄、自己の枠内から抜け出せないことは、成長過程に問題があったことにもなる。但し、中身は今回は調査していない。

なお、受講と天秤にかけられるのはクラブやサークル活動とアルバイトであり、それらに時間を多く掛けている者は少なくない（表 26-2, 3）。「クラブで多忙」な者は全平均で38.2%であり、「アルバイトで多忙」な者は全体で27.3%に及ぶ。特にアルバイトは私大の方が比較的多く（1%）、男子の場合、39.4%となっている。なお、短大も43.6%と多い。これらは勿論、学習に時間的・身体的にマイナスで、例えば、前述の睡魔の一つの要因にもなっているであろう。少なくとも、クラブと学習の相互問題は、大学教育の中で更に検討されねばならないことである。

表25-5 「大学院への進学希望」者（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	3.6	3.0	3.4
B 大	21.8	14.6	18.8
私 大 平 均	12.7	8.8	11.1
D 大	38.6	15.8	34.6
E 大	4.8	12.5	8.9
F 大	()	11.1	8.7
G 大	—	8.1	8.1
国公立大平均	21.7	11.9	15.1
全 平 均	17.2	10.9	13.8
C 短 大	—	0	0

表26-1 「自分のしたいことで多忙」（%）

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	33.6	34.8	34.1
B 大	50.9	51.2	51.0
私 大 平 均	42.3	43.0	42.6
D 大	40.9	57.9	43.9
E 大	14.3	25.0	20.0
F 大	()	38.9	43.5
G 大	—	46.8	46.8
国公立大平均	27.6	42.2	38.5
全 平 均	34.9	42.4	39.9
C 短 大	—	34.2	34.2

表26-2 「クラブ、サークル活動で多忙」
な者 (%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	28.8	36.9	32.5
B 大	45.5	43.9	44.8
私大平均	37.2	40.4	38.7
D 大	37.5	47.4	39.3
E 大	28.6	29.2	28.9
F 大 ()		44.4	47.8
G 大	—	36.0	36.0
国公立大平均	33.1	39.3	38.0
全 平 均	35.1	39.6	38.2
C 短大	—	20.5	20.5

表26-3 「アルバイトで多忙」な者

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	36.9	32.6	34.9
B 大	41.8	26.8	35.4
私大平均	39.4	29.7	35.2
D 大	12.5	42.1	17.8
E 大	14.3	16.7	15.6
F 大 ()		38.9	39.1
G 大	—	20.7	20.7
国公立大平均	13.4	29.6	23.3
全 平 均	26.4	29.6	27.3
C 短大	—	43.6	43.6

「通学や家事での多忙」者についても＜表26-4＞に見るように、26.9%と、下宿生活や遠距離通学の学習への影響が見られる。特に女子が比較的このことで時間を多く使っていることになる(1%)。なお、「ぼうっと過ごす」者も全体として多く24.0%、つまり、4分の1もいる。特に地方大学と短大に多く(ともに1%)、それぞれ37.8%、34.2%もある(表26-5)。「友人との交際が多い」者は、比較的私大に多く(1%)、29.1%で、全体では21.4%となっている。この他、「読書」18.3%は、先に見た「専門読書」の13.5%に比べると広がりを示す。

表26-4 日常生活状況 (%)

回 答 項 目	国公立	私立	男子	女子	全平均	短大
通学や家事で多忙	27.5	25.8	18.4	32.1	26.9	14.5
友人との交際が多い	17.5	29.1	24.3	21.6	21.4	30.8
日常、読書が多い(表24-3の再録)	19.9	15.3	20.5	17.2	18.3	10.3
時間を持て余す	8.1	3.3	6.7	6.3	6.5	6.0
パチンコ・麻雀などをする	2.9	7.7	8.2	0.1	4.5	0
頭痛・不眠・だるい感がある	16.4	12.0	12.9	13.5	14.9	16.2

m. 私語(再考)

大学生の学習意欲の低下を現象的典型的に示すものが「私語」であることは、前稿でも考察した。私語は普通、受講態勢がない場合に起こるからである。前稿＜表15-1＞の教員の判断では、「私語がない」は、平均17.1%と少なく、教員の大半が程度の差はあれ、私語を体験していた。そして、次稿で詳述するが、大学教員の私語を防ぐ処置の中で「注意・叱責」が31.4%も占めているのである。

表26-5 「ぼうっと過ごすことが多い」者(%)

大 学 別	男子	女子	計平均
A 大	21.5	24.0	22.7
B 大	12.7	14.6	13.5
私大平均	17.1	19.3	18.1
D 大	19.3	10.5	17.8
E 大	33.3	41.7	37.8
F 大 ()		33.3	30.4
G 大	—	21.6	21.6
国公立大平均	26.3	26.8	26.9
全 平 均	21.7	24.3	24.0
C 短大	—	34.2	34.2

なお、学生の自己判断によれば＜表 27-1＞＜図 8 と 9＞のように、「自分も雑談することが多い」者は、大学間較差はあるが、平均 14.8% で意外に少ない。しかし、その者が種々の授業に出席するため、多くの講義で私語が見られることになる。なお、短大は 39.3% と高く（1%）、私大の方が国公立大の 7.3% に比して 29.9% と高い（1%）。一方、世間の或種の判断とは異なり、男子の方に雑談が多く、女子の 12.2% に対し、21.1% という結果になっている（5%）。

授業中「私語はない」とするのは＜表 27-2＞＜図 10＞に見るとおり、全平均で 24.3% である。しかし、これも大学間較差が大きく、特に私大の場合、私語がない授業は、短大の 1.7% とともに、5.3% と少なく、国公立の 33.8% との間に大きな差がある（1%）。なお、旧帝大の学生は 53.3% が「私語はない」という。

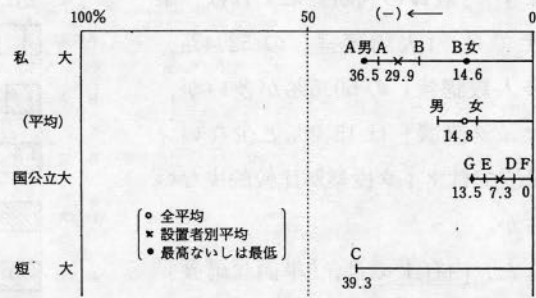


図 8 「自分も私語をする」者の大学間・男女間較差

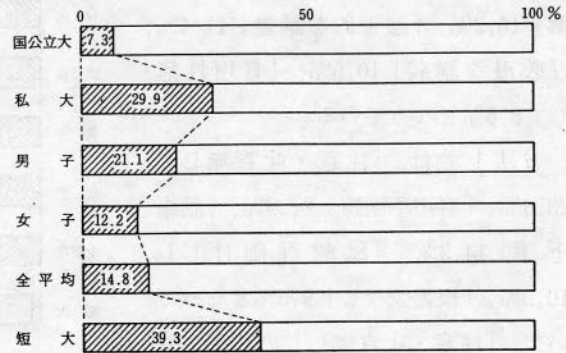


図 9 「自分も私語をする」者

表 27-1 「自分も私語する」者 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	36.5	32.6	34.7
B 大	32.7	14.6	25.0
私大平均	34.6	23.6	29.9
D 大	5.7	0	4.7
E 大	9.5	12.5	11.1
F 大	()	0	0
G 大	—	13.5	13.5
国公立大平均	7.6	6.5	7.3
全平均	21.1	12.2	14.8
C 短大	—	39.3	39.3

表 27-2 「私語はない」とする者 (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	4.7	1.3	3.2
B 大	10.9	2.4	7.3
私大平均	7.8	1.9	5.3
D 大	52.3	57.9	53.3
E 大	28.6	8.3	17.8
F 大	()	33.3	47.8
G 大	—	16.2	16.2
国公立大平均	40.5	28.9	33.8
全平均	24.1	19.9	24.3
C 短大	—	1.7	1.7

では、どのような授業に私語が多いのか？ 大学教員の評価を、前稿＜表 15-3＞で、また、学生の判断を＜表 15-4＞で示した。それらを改めて内容的に整理すれば、＜表 27-3＞のようになる。

まず、『教員の判断』によれば、条件上では、「大講義室」の52.4%、「多人数講義」の50.5%が多いが、「マイク講義」は15.2%と少ない。国公立ではマイク授業が比較的少ないからか。

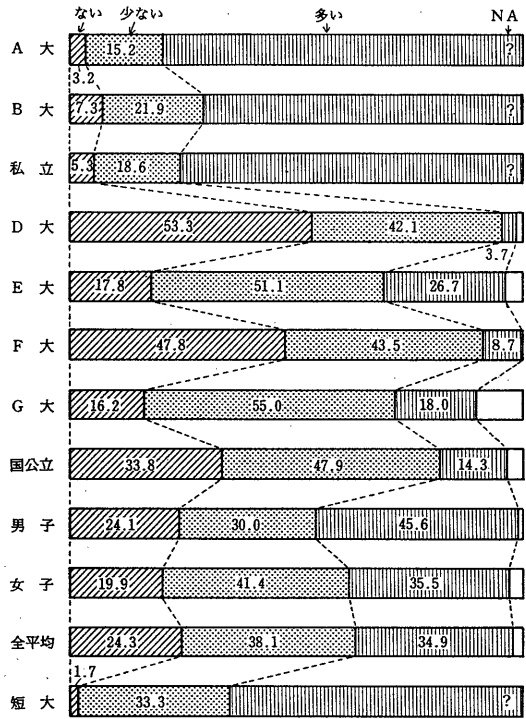
また、内容上では、「単調な講義」25.7%。そして、以下、「思考の触発なし」18.1%、「無内容」17.1%、「難解」16.2%、「独善的な講義」11.4%、「散漫な講義」10.5%、「有用性無し」8.6%となっている。

方法上では、「注意・叱責無し」23.8%、「音声不明瞭」21.9%、「話術下手」14.3%、「試験評価甘し」10.5%、「板書少なし」9.5%となっていて、「注意・叱責無し」の高率には、私語を止めない学生の主体的意欲の少なさへの不満が込められている。

なお、教員の人格・性格については、教員自身は余り重視していない。つまり、「尊敬できない先生」9.5%、「ぞんざいな先生」7.6%、「性格の温和な先生」5.7%程度である。なお、「非常勤講師」については8.6%が私語との関係を留意している。

「私語の少ない授業」は、以下、少ない方から順に「男子が多い」1.9%、「出席を取らない」2.9%、「余談多し」2.9%、「資格関係科目」2.9%、「提出物・試験少なし」3.8%、「教科書使用」4.8%、「必修科目」5.7%となっている。これについては前稿でも触れた。このうち「男子が多い」は、「女子学生が多い授業に私語が多い」7.6%とともに、必ずしも当たっているとは言えない。なお、「出席を取らない」講義は、初めから私語を交わす者が欠席するからであろう。同じく「提出物・試験の少ない」講義もこれに当たる。「必修科目」や「資格関係科目」は、熱心に聴くのであろうか？「余談が多く」興味を引く講義と、「教科書を使用」し、学習の手掛かりが得易い授業が、私語が少ないと言える。なお、教科書は自己学習の可能性を与えることから、出席者が少ないとも考えられる。

『学生による判断』で(表 27-4) 条件上最も多いのは、何といても「大講義室」である(表 27-5)。特に私大の場合が72.5%と高く、逆に、旧帝大の場合は15.9%と極端に少ない(1%)。私大の場合と大教室の人数規模に違いが或程度あろうが、事実として学生が部屋の



注) ?はNAの%不明(アンケート・ミス)

図10 私語の程度 (%)

大小に左右されず私語をしないということであろうか。

表27-3 大学教員による「私語の多い授業」判断（複数回答）前稿＜表15-3＞の整理（％）

分類	校 種	大 学			短大
	回 答 項 目	国公立	私立	全平均	
条件上	大講義室	53.3	52.0	52.4	54.2
	多人数講義	40.0	54.7	50.5	50.0
	マイク使用講義	10.0	17.3	15.2	4.2
	座席指定なし	0	12.0	8.6	8.3
内容上	単調な講義	16.7	29.3	25.7	37.5
	思考触発無し	6.7	22.7	18.1	29.2
	無内容な講義	10.0	20.0	17.1	20.8
	難解な講義	10.0	18.7	16.2	16.7
	独善的講義	3.3	14.7	11.4	4.2
	散漫な講義	3.3	13.3	10.5	16.7
	有用性に欠ける講義	6.7	9.3	8.6	20.8
方法上	注意や叱責なし	10.0	29.3	23.8	37.5
	音声不明瞭	23.3	21.3	21.9	20.8
	話術下手	13.3	14.7	14.3	20.8
	試験評価甘し	6.7	12.0	10.5	12.5
	板書少なし	6.7	10.7	9.5	7.1
教 員	尊敬できぬ教師	3.3	12.0	9.5	4.2
	ぞんざいな教師	3.3	8.0	7.6	4.2
	性格の温和な教師	3.3	6.7	5.7	16.7
	非常勤の教師	6.7	9.3	8.6	25.0

表27-4 学生による「私語の多い授業」判断（複数回答）前稿＜表15-4＞の整理

	回 答 項 目	国公立	私大	男子	女子	全平均	短大
条件上	大講義室	34.9	72.5	57.0	47.6	47.4	46.2
	友人同席	31.2	37.2	30.5	36.5	33.2	41.9
内容上	無内容な講義	26.2	48.2	33.0	38.3	33.5	53.8
	無整理な講義	13.2	30.2	20.9	21.4	18.8	35.9
	難解な講義	13.1	24.5	19.5	18.0	16.9	38.5
	有用性のない講義	6.7	20.0	18.5	8.9	11.1	23.9
方法上	音声不明瞭	21.0	43.9	28.8	33.8	28.6	32.5
	板書の少ない講義	5.1	16.4	11.8	7.5	8.8	18.8
教 員	馴染めぬ教師	2.9	18.3	12.1	7.1	8.1	14.5
	温和な教師	4.1	12.9	11.5	5.2	7.1	9.4

条件的には、もう一つ、＜表 27-6＞に見るように、「友人同席」の場合が大きく、全平均で3分の1、33.2%を占める。なお、これについても旧帝大が18.7%と少ない（1%）のは、友人の有無にかかわらず、私語をしないということであろうか。

講義の内容で見れば、「無内容の講義」が33.5%と高い（表 27-7）。特に私大に多く

表27-5 大講義室で私語が多い (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	66.4	74.2	70.0
B 大	83.6	65.9	75.0
私大平均	75.0	70.1	72.5
D 大	15.9	15.8	15.9
E 大	61.9	62.5	62.2
F 大	()	27.8	21.7
G 大	—	39.6	39.6
国公立大平均	38.9	36.4	34.9
全平均	57.0	47.6	47.4
C 短大	—	46.2	46.2

表27-6 友人同席で私語が多い (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	35.4	42.9	38.9
B 大	32.7	39.0	35.4
私大平均	34.0	41.0	37.2
D 大	20.5	10.5	18.7
E 大	33.3	54.2	43.5
F 大	()	44.4	34.8
G 大	—	27.9	27.9
国公立大平均	26.9	34.3	31.2
全平均	30.5	36.5	33.2
C 短大	—	41.9	41.9

(1%) 48.2%となっているが、国公立は26.2%である。しかも、旧帝大の場合10.3%と極端に少ない(1%)。それは、事実として講義内容に差があるのか？ なお、短大の場合「無内容」が53.8%と半ばを越えているが、これと併せて、学生が、何をもって、またどのような基準で「無内容」とするのか、質的に更に検討されねばならないだろう。なお、「整理されていない講義」の、全平均18.8%に対し、私大が30.2%も有る(1%)こと、「難解」な講義も、国公立の13.1%に対し、私大が24.5%である(1%)ことは、同様、教育姿勢の問題を含めて課題であろう。

なお、学生が「役に立たない」とする講義は、科目自体の属性による面が大きいが、それでも、私語が全体で11.1%と少なく、特に国公立が私大より少ない(1%)ことは、未だ「真理探究」的姿勢が残っているからか？

なお、方法的には、「音声不明瞭」が、教員にも意識されていたように、聴く側の学生には、28.6%を占める問題条件になっている。私大が43.9%と、国公立大より極端に高い(1%)のは、教員の年齢層・教室の広さ・進行中の雑談の妨害などが災いしているのだろうか？ 一方、「板書の少なさ」は、前述の「ノート取り」との関係否定できないが、全体では8.8%しか意識されていない。なお、私大が16.4%と高い(1%)ことは、私大の方が板書ノートが多いということだろうか？ <表17-3>とは相応じていない。

なお、教員の人柄については、既に見た教員判断と余り変わらない。つまり、「馴染めない先生」「温和しい先生」といった性格について、それぞれ8.1%、7.1%である。ただ、私大の学生が教員の人柄について関心が深い(1%)。そして、実は<表28-1>に見るように、全体

表27-7 無内容の講義に私語が多い (%)

大学別	男子	女子	計平均
A 大	39.4	54.5	46.4
B 大	49.1	51.2	50.0
私大平均	44.3	52.9	48.2
D 大	10.2	15.8	10.3
E 大	33.3	50.0	42.2
F 大	()	27.8	21.7
G 大	—	30.6	30.6
国公立大平均	21.8	31.1	26.2
全平均	33.0	38.3	33.5
C 短大	—	53.8	53.8

でも「学習意欲の湧く授業内容」としては「教員の人柄」が 49.9%を占めるのである。

これら講義中の私語の多少は、教員と学生両者の判断を正確に比較することはできないが、或程度<図 11>に示したように相関連し、全体として学生を感じる問題性が教員のそれより強いということになる。例えば、「無内容さ」や「難解さ」等は、学生にとって教員が判断するよりもっと重く、したがって、教員に、学生に見合った説明と方法を考慮し工夫することを求めているようにみえる。

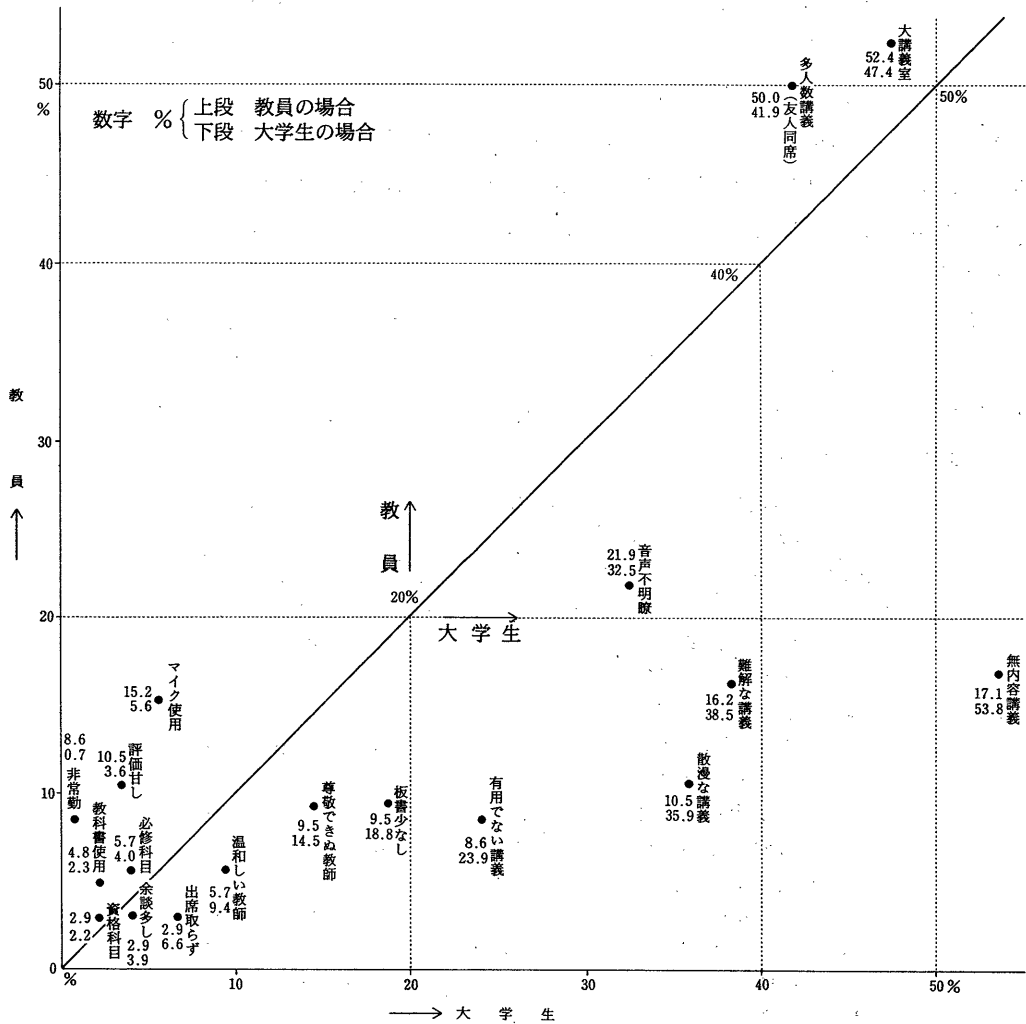


図 11 私語の多い授業（教員と大学生の意見の相関）

なお、「私語の少ない講義」は「出席をとらない」6.6%、「出席を取る」5.7%と、両者矛盾しているが、殆ど差がなく、出席をとる・取らないは、先の教員判断とは異なり、学生にとっては私語と余り関係がないのだろう。そのほか、「マイク講義」5.6%、「必修科目」4.0%、

「余談が多い講義」3.9%、「試験の評価が甘い科目」3.6%、「午後の授業」6.0%など、私語が教員の判断とほぼ一致して少ない。「必修科目」と「余談の多い講義」を除けば、私語する者が現実に出席していないのであろう。(未完)

付記)

以上、紙数の関係で、今回も考察(1)「実態整理及び診断」の「つづき」で筆を置かざるをえない。しかし、以下、既にできている草稿を要約して、次回の見通しを示しておきたい。

考察(2)は、「学習意欲低下の要因分析」である。ここでは、アンケート内容として次のような項目につき回答を求めたことを中心に考察した。

▲学生の「大学進学理由」及び「進学決定時期」▲高校教員による「生徒の進学理由判断」▲学生による「小・中・高校教育の回顧」▲学生の「家庭教育回顧」及び「両親の性格・行動評価」▲学生の「価値観」「自己の性格評価」▲中高教員及び大学教員による「学習意欲低下要因判断」。

考察(3)は、「学習意欲喚起の方策」である。これについては、先に触れた「私語」の問題を初めとして、対応のあるべき諸点が既に見えているといえるが、学生が「学習意欲の湧く講義内容」及び「同授業方法」をアンケート回答として示唆しているので、<表28-1及び2>として此处に添えておく。

表28-1 学生による「学習意欲の湧く授業内容」複数回答(%)

順位	校 種 内 容	大 学			短大
		国公立	私立	計平均	
1	ユニークさ	53.1	53.6	53.3	65.0
2	教員の人柄	50.2	49.2	49.9	56.4
3	理解容易な講義	49.4	45.5	48.1	63.2
4	余談の多い講義	43.9	34.3	40.7	47.0
5	要点の明確さ	30.5	38.8	34.9	43.6
6	ノートし易さ	32.9	38.0	34.6	53.8
7	現実問題に言及	32.2	28.1	30.8	18.8
8	単調でない講義	30.6	28.6	29.9	36.8
9	記憶より理解	23.8	35.0	27.5	24.8
10	思考を触発	23.8	35.0	27.5	24.8
11	豊かな内容	24.4	24.9	24.6	17.1
12	具体例多し	22.8	25.5	23.7	19.7
13	迫力	16.2	24.3	18.9	7.7
14	適当な早さ	17.1	19.9	18.0	19.7
15	学生心理に留意	15.7	17.5	16.3	23.9
16	基礎から累積	15.3	17.5	16.0	9.4
17	教員の思想明確	12.0	12.3	12.1	3.4
18	説明の厳密さ	9.1	10.1	9.4	3.4
19	年間の流れ明確	6.7	13.4	8.9	5.1

表28-2 学生による「学習意欲の湧く授業方法」複数回答（％）

順位	校 種 方 法	大 学			短大
		国公立	私立	計平均	
1	音声明快	64.9	54.4	61.4	53.0
2	資料配布	48.7	50.2	49.2	41.9
3	教育機器活用	45.0	28.0	39.4	43.6
4	教科書使用	28.4	57.5	38.1	65.8
5	小人数授業	36.4	38.0	36.9	23.9
6	提出物の返却	30.2	45.6	35.4	17.9
7	板書多し	33.1	32.6	32.9	38.5
8	励ましある講義	21.0	25.7	22.6	25.6
9	発言発表機会	18.9	15.4	17.7	9.4
10	参考文献紹介	12.1	19.7	14.6	8.5
11	討論機会あり	13.2	17.1	14.5	6.0
12	雑談者を叱責	6.5	15.0	9.3	3.4
13	レポート多し	5.0	13.6	7.9	4.3
14	試験多く公正	6.3	9.3	7.3	1.7
15	指名質問あり	6.7	3.2	5.5	1.7
16	補講あり	1.5	1.5	1.8	2.6
17	試験評価厳しい	0.2	2.3	0.9	0

我々は、坂元昂らの試みたような『授業改善視点表』³⁾を自作することによって、少なくとも自らの講義を現代の学生の意欲喚起と学習効果に繋ぐ努力をせねばならないといえる。つまり、アメリカで実施されている講義への学生の評価を導入することは、個人的にはともかく、全体としては、現段階で種々の困難があるが、少なくともそれに近づく前段階として、教員各自の特別な考察と実行が求められているといえる。

注

- 1) 質問文の冒頭に記した*は、前稿でも言及したとおり、坂元昂の調査文『学習技能の調査』及び『学習意欲の調査』から、比較の意図で借用したものである（以下同じ）。但し今回は比較としては未だ活用していない。

坂元昂「大学生における学習技能と学習意欲」（喜多村和之・編『大学教育とは何か』玉川大学出版部 1988）

- 2) 前掲書 pp. 152, 153

- 3) 同上 p. 147 『授業改善視点表』

- 4) 3種のアンケートの内、今回は、学生対象のもののみを採録し、他はページ数の都合で次回に廻すことにした。

(1990.9.20)

学習に関するアンケート

1990. 6

仏教大学教育学部

吉岡 剛

〈お願い〉

*授業研究のため、次の質問の回答に御協力下さい。

該当項目に○じるしを付け、必要の場合（ ）内に記入してください。

I 回答者自身について（無記名）

1. 男, 女
2. 昭和（ ）年（ ）月（ ）日生
3. 現在（ ）学科（ ）回生
4. 自宅通学, 自宅外通学
5. きょうだい（除自分）（ ）人,（兄__人, 姉__人, 弟__人, 妹__人）

II 学習意欲の出る講義は？

1. 内容上 ……（5・6項目まで選択）
 1. 授業の年間の流れが通っている。
 2. 学習内容の要点がはっきり示されている。
 3. 基礎から学習が積み重ねられていく感がある。
 4. 説明に厳密さがある。
 5. 説明の仕方がユニークである。
 6. 講義に迫力がある。
 7. 余談が入って面白い。
 8. 授業が単調でなく山場がある。
 9. ノートが取りやすい。
 10. 講義の早さが適度である。
 11. 講義内容がわかりやすい。
 12. 具体例を数多く示す。
 13. 教師の人柄が好ましい。
 14. 教師自身の思想がはっきり示される。
 15. 講義内容が豊かである。
 16. 現実の問題と関係させて講じられる。

17. 学生の心理や実態をよくつかんでいる。
18. 記憶するより理解することに重点を置いている。
19. 考え方を触発してくれる。

2. 方法上 ……（５・６項目まで選択）

1. 教科書を使用している。
2. レポートを求めることが多い。
3. 参考書をよく紹介する。
4. レポートや試験を返却してくれる。
5. 試験の回数が多く評価が公正と思われる。
6. 学生をよく励ましてくれる。
7. 学生に発言・発表の機会がある。
8. 学生同士の討論の時間がある。
9. 少人数の教室で落ち着いて聴ける。
10. 講義中指名して質問される。
11. 試験が難しく、評価も厳しい。
12. 雑談している者を叱責する。
13. プリントなど資料をよく提供する。
14. 黒板をよく使う。
15. ビデオやOHPをよく使う。
16. 休講した場合、後で補講をする。
17. 発音が明快である。

Ⅲ 自分の学習について

1. 姿勢 ……（５・６項目まで選択）

1. 進学させてくれた親に感謝しながら勉強している。
2. すべきことは、うまく実行できるよう方法を考えてやる。
3. 難しい問題にはファイトが湧き、挑戦する。
4. グループ活動では自分が率先してやる。
5. 疑問点は徹底して追求する。
6. 意見があるときは進んで発言する。
7. 学期初めなど生活や勉強の計画表を立てる。
8. 失敗したとき、原因を突き止めようとする。
9. 目的意識をもって勉強している。
10. 大学で学ぶ者は卒業後社会にそれを還元する義務があると思っている。

11. 自分の立てた勉強の計画は出来るだけ実行している。
 12. 能率が上がるよう時々勉強の仕方を変えてみる。
 13. 試験前や課題が出たときに勉強する。
 14. 高校までと変わりなく普通に勉強している。
 15. 高校ほど勉強しなくなった。
2. 方法 …… (3・4項目まで選択)
1. 何か調べるときや、物事を考えるときは、自分のアイデアを大切にする。
 2. 自分の身近かなものに関連させて理解したり覚えたりする。
 3. 大切だと思うところに印を付けたり、線を引いたりする。
 4. ノートを取るときは、記録の仕方を工夫して解りやすくする。
 5. 講義は要点を抑えながら聴いている。
 6. 先生が黒板に書いたものをノートに取る。
 7. 試験のまえに友人のノートを借りることが多い。
 8. 試験のまえには計画を立てて相当の準備をする。
 9. ふだんから専門科目に関する本をよく読む。
 10. 普通、毎日その日のノートの整理をする。

IV 大学について

1. 大学進学を決めたのはいつ? …… 1. 小学校高学年 2. 中学校 3. 高等学校
2. 進学理由は? …… 1. 親が勧めた。 2. 友達が行く。 3. 就職に有利。
4. 高校卒で社会人になるのは不安。 5. 教養の必要。
6. 勉強がしたかった。 7. 実力を身に着ける。
8. 資格の必要性。 9. その他 ()
3. 大学についてどう思う?
1. 期待はずれ。 2. 教養・知識が高まった。
3. 思考力が高まった。 4. 学問に興味があった。
5. 勉強の仕方が解らない。 6. 大学院に進みたい。
7. 学習の目標を失っている。 8. 受講科目を指定しすぎる。
9. 大学を早く卒業したい。 10. 卒論に早く取り掛かりたい。
11. 大学で取得中の資格・免許は?
()
4. 授業出席 …………… 1. 欠席は殆どしない。 2. 遅刻・早退は殆どしない。
3. 授業中、睡魔に襲われることが多い。
4. 授業中、雑談することが多い。 5. ノートをよく取る。

現今大学生の学習意欲に関する一考案（2）

6. 1 講時 90 分を長く感じる。 7. 講義に集中できない。
8. やる気がなくて困っている。
9. 講義は考えながら聴いている。
10. 演習や講読の時間は熱心に出席する。
11. 休講が多いと不満（15 講義中許せるのは 回）。
12. 役に立つ内容や資格関係の講義は熱心に聴く。
5. 日常生活 …………… 1. アルバイトが忙しい。 2. クラブ・サークルが忙しい。
3. 勉強が忙しい。 4. 友人と居ることが多い。
5. 自分でやりたいことが多くて忙しい。
6. 通学・家事で時間が取られる。
7. 時間を持て余している。
8. 頭痛・不眠・だるい感じがよくする。
9. パチンコ・麻雀などゲーム事をよくする。
10. 何となくボーッと過ごすことが多い。
11. 読書（雑誌以外）に過ごすことが多い。
6. 講義中 …………… a, 私語が多い b, 私語は少ない。 c, 私語はない。
(c 以外の回答者は、次の選択肢にもチェックしてください。)
1. 大教室の講義。 2. 午後の講義。 3. 出席を取る授業。
4. 出席を取らない講義。 5. 仲の良い友人と聴く講義。
6. 必修科目。 7. 教科書使用の講義。 8. マイク講義。
9. 声の通らない講義。 10. 整理されていない講義。
11. 難しすぎる講義。 12. 内容の感じられない講義。
13. 内容が将来役に立つとは思われない講義。
14. 黒板を余り使わない講義。 15. 余談の多い講義。
16. 資格や免許に無関係の講義。
17. 試験や評価が易しい講義。 18. なじめない先生。
19. おとなしい先生。 20. 非常勤講師。
21. その他 ()
7. 学外生活 …………… 1. ボランティア活動に参加。 2. 宗教活動に参加。
3. 社会のサークルに入会。 4. 図書館の利用。
5. 資格や実力を付けるため専門学校に通学。
6. 何か役に立つことをしたいと思っている。
7. スポーツに力を入れている。

8. 取得済み資格など…英検（ ）級。算盤（ ）級。書道（ ）。柔道（ ）段。
剣道（ ）段。囲碁（ ）。将棋（ ）。ワープロ（ ）級。
その他（ ）。

V これまでの学習生活を振り返って

1. 小学校 …………… 1. 良い先生がいた。 2. 組替えが多かった。
3. 宿題が多かった。 4. 怖い先生に教わった。
5. 友達からいじめられた。 6. 体罰を受けたことがある。
7. 今も付き合っている友人がいる。
8. 学校にいきたくないこともよく有った。
9. クラスの中心的存在だった。
10. 親はよく授業参観に来た。 11. 本をよく読んだ。
12. 帰宅後よく外で遊んだ。 13. 鍵っ子で寂しかった。
14. 勉強には自身があつた。
2. 中学校 …………… 1. 学級や自治会の委員をした。 2. 校内暴力で荒れていた。
3. スポーツに夢中になった。
4. 学習指導の上手な先生がいた。
5. 校内暴力で学校が管理的になった。
6. 登校拒否症になった。 7. 忘れ物をよくした。
8. 異性のことが気になった。
9. 友人とよく行動を共にした。
10. 授業に集中できなかった。 11. 音楽を楽しんだ。
12. 勉強についていけなくて悩んだ。
13. 自分を理解してくれる先生がいた。
14. 学校によく反抗した。
15. 校内暴力はなかったが先生達は警戒的だった。
16. 服装など規則が厳しかった。 17. テレビをよく見た。
18. 学校が荒れていて学習指導を十分受けなかった。
19. 高校受験に悩んだ。 20. 自分のことは大体自分でした。
21. 生徒指導に熱心な先生に出会った。
22. 家出を考えたことがある。
3. 高校 …………… 1. 能力別編成だった。 2. 受験勉強に熱心な学校だった。
3. 授業中騒がしかった。 4. 体をスマートにしたいと思った。
5. 人の言いなりになっている人を見ると腹が立った。

6. 制服がなければ良いと思った。
7. 授業をサボる人が結構いた。
8. 新聞をよく読んだ。
9. クラスをリードして行事を成功させた。
10. アルバイトを経験した。
11. 苦手な科目がはっきりしていた。
12. 宿題がやたらに多かった。
13. 比較的真面目に勉強した。
14. 勉強以外の本をよく読んだ。
15. 自殺を考えたことがある。
16. 独り歩きや独り旅をよくした。
17. 受験勉強で忙しかった。
18. クラブ活動が楽しかった。
19. 勉強の仕方がわからなくて悩んだ。
20. 校内暴力があって学習指導を十分受けなかった。
21. 歌や楽器演奏に夢中になった。
22. 中退を考えたことがある。
23. ゆっくりできる日曜や休暇が楽しみだった。
24. 大学・専攻の選択に苦しんだ。
25. 劣等感が強かった。
26. 話せない英語や難しい数学の学習に疑問をもった。
27. 深夜ラジオをよく聴いた。
28. 友人とよく議論した。

VI 家庭教育を振り返って、

1. 父のイメージ …… 怖い、民主的、口うるさい、明るい、気まぐれ、活動的、世話焼き、冷淡、甘い、無知、社交的、センスがない、勉強家、暗い、優しい、
2. 母のイメージ …… 怖い、民主的、口うるさい、明るい、気まぐれ、活動的、世話焼き、冷淡、甘い、無知、社交的、センスがない、勉強家、暗い、優しい、
3. 親の子育て ……
 1. よく誉めてくれた。
 2. よく褒美をくれた。
 3. よく人と比較した。
 4. 何でもよく一緒にした。
 5. よく「承知しない」と脅された。
 6. よく叱られた。
 7. よく励ましてくれた。
 8. 親とよく雑談を楽しんだ。
4. 親の勉強観 ……
 1. 「勉強、勉強」と余り言わなかった。
 2. 勉強していれば気嫌が良かった。
 3. よく競争心を喚起した。
 4. 期待が強かった感がある。
 5. 点数や席次などにこだわらなかった。
 6. 勉強のことならお金を簡単に出してくれた。

7. 工夫や努力を評価した。 8. 絵や音楽なども重視した。
9. 成績が上がると小遣いもあげてくれた。
10. 勉強より手伝いを重視した。
11. 家庭教師を付けてくれた。
12. 担任の善し悪しをよく気にした。
13. 先生の批評をよくした。
5. 自分の部屋 ……… 1. きょうだいと一緒に落ち着かなかった。
2. テレビが有ってよく見た。 3. 勉強に集中できた。
4. マンガの本が沢山有った。 5. 友達がよく遊びに来た。
6. 自分の好みでインテリアに気を使った。
7. 鍵がかかれば良いと思った。
6. 勉強塾 …………… 1. 自分の意志で通った。 2. 親に勧められて通った。
3. 塾通いは辛かった。 4. 塾には良い先生がいた。
5. 塾は効果があったと思う。 6. 学校より楽しかった。

VII 自分の性格・価値観・将来像

1. 性格 …………… 消極的。 積極的。 従順。 怠け者。 根気強い。 負けず嫌い。
外向的。 内向的。 我慢強い。 社交的。 無口。 短気。 軽率。
依頼心が強い。 飽きっぽい。 調子者。 世話好き。 行動的。
協調性。 責任感。 凡帳面。 ルーズ。 冒険心。 勇敢。 明るい。
温和。 神経質。 情熱的。 反抗的。
その他 ()。
2. 価値観 …………… (3項まで選択)
創造力。 社会への貢献。 リーダーシップ。 平凡。 安定。
自己実現。 幸福。 富。 地位。 名誉。 ユニークさ。
趣味的生活。 批判精神。 その他 ()。
3. 将来像 …………… 教育職。 金融関係。 会社事務員。 会社営業マン。 福祉関係職。
ジャーナリスト。 法曹関係。 医療関係。 公務員。
アルバイト。 芸術関係。 商業。 農牧従事。 技師。 芸能関係。
その他 ()。 未定。

御協力感謝致します。